

大地

第 52 号
2016. 5. 10. 発行
浄 國 寺
上越市 3丁目 14-10
☎025-523-5724

俳句

山崎 睦

散り残る花にも似たる我が命

石一つ犬の墓にも盆の花

秋草の中に道とは言へぬ道

聞き役となりて林檎の皮を剥く

風邪に寝て多くいただくおかげ様

又年を迎えし不思議有難し

(平成十七年 作一八十九歳)

ヒギ・ミダリ

山崎隆史

人は、鏡の中の像は左右反転している、と見ます。ところが数学的・幾何学的には、左右反転ではなく前後反転なのです。正確には、鏡面の垂直方向に反転、です。横に鏡があれば、確かに右と左が反転しています。足元に鏡があれば、上と下が反転しているでしょう。この気分のまま改めて正面の鏡を見ると、前後が反転しているのが分かります。左右反転していると思ってしまうのは、心理学的な理由のようです。

京都市を地図で見ると、地図は北を上にして描かれるので、右に「左京区」左に「右京区」という位置関係になります。「天子南面す」の言葉どおり、御所から南向きに見て左側(東)に左京区、右側(西)に右京区となつていゝのです。

お寺の本堂は、内陣(一段高くなった板張りの所)の左右に余間(よま)という所があり、阿弥陀様から見て左(阿弥陀様に向かつて右)を左余間、阿弥陀様から見て右(阿弥陀様に向かつて左)を右余間と呼びます。浄國寺には半端な右余間しかありませんが、

野球の外野のポジションは、センター(中堅手)から見て右にレフト(左翼手)、左に

ライト(右翼手)なのですが、これはホームベースやバッターの方から見て、左にレフト、右にライトなのです。

右と左は、どこからどこを見るかによって異なるのです。

さて、「右」「左」と言われても、とっさに右と左の判断が付かない人がいます。それほど珍しくありません。

私の父も実はそうなのですが、「右」「左」の代わりに「十字」「九字」と言うのですが、判断できるのです。「十字」「九字」というのは、浄土真宗のお内仏(お仏壇)で、向かつて右に掛ける「十字名号」(帰命尽十方無碍光如来)、向かつて左に掛ける「九字名号」(南無不可思議光如来)から来ています。(親鸞聖人、蓮如上人の絵像を掛ける場合もあります)

浄土真宗では、「自分が信心する」のではなく、「阿弥陀様から信心をいただく」という考え方を大事にするようです。それでもやはり阿弥陀様の視点に立つというのは難しく、阿弥陀様に向かった自分の視点で考えるので、「右余間」「左余間」の呼び名に戸惑ったり、「十字」「九字」をそれぞれ「右」「左」と結び付けたりするのでしよう。

立ち位置と向きによつて見え方だの右左だのが違ってくる、という単純な話を、長々とややこしく書いてみました。

高田別院で帰敬式を受けて

幸町 川崎美喜子

昨年、高田別院で全六回の真宗講座を受けた。仏の教えは奥が深く難しいことも多いが、日頃より法話を聞くことが好きで、より知識を得たいとも思っていたため、楽しくかつ興味を持って受講できた。

何回目かの講義で「法名を戴くということ」のテーマでお話があった。このテーマには特に関心があったため、集中して聴けた。

「生前に法名を」―このことは一般的には知られていない気がする。私自身、「法名とは亡くなってから戴くもの」という勝手な思い込みがあった。受講後、生前法名の話を夫にしたところ、意外にも(？)「ああ、いいよ」との返事。そして夫と共に法名を戴くこととなった。

帰敬式当日、別院の「阿弥陀如来」の前で御連枝様より一人ひとり丁寧に「剃髪」をしていただき、引き続き法名を授与された。その時、「おめでとう」と言われた。「おめでとう」とは？夫の言うには「仏の子」になっただよ」と。身も心も引き締まり、新しく生まれ変わったような気持ちになった。厳粛な雰囲気の中、門徒の方々に見守られて無事終了。心地よい疲れを残し、帰路に就いた。

「本願念仏の道に生きる喜び」これが私の戴いた法名の意味である。大変有難く、朝夕に「阿弥陀様」に手を合わせる毎に法名を眺めていたい心境になる。

このたびは大変良き機会を与えてくださった浄國寺様に心より感謝すると共に、これからもお寺との繋がりを大事にして行きたいと思う。

南無阿弥陀仏

※川崎さんは、昨年の秋に帰敬式(ききょうしき)を受けられました。親鸞聖人の真宗の教えに身を置かれた儀式で、その名のりである法名を戴かれました。切れの良い簡潔な文章のなかに、自らの気持ちを率直に表現されています。

桃の実

越谷市 相馬郁子

早いものであと一カ月ほどで君が亡くなってから一年になります。部屋に飾ってある写真を見るたびに「どうしてしんじやったの」を繰り返してしまいます。

四十歳の働き盛りに仕事に行き詰まり、自ら旅立ってしまいましたね。親から見れば結婚し、家も建て、仕事も順調、良かったーと思っていました。それなのに突然亡くなり受け入れられませんでした。

今、仏になり、写真を見ると「どうして」と語りかけてしまいます。ホテル勤務でしたので、朝一番電車で出かけ、帰りは最終電車を体を壊さねばいいが、とハラハラしましたけど体より心が参ったのですね。

幼稚園から高校まで十四年間皆勤。明るく楽しい息子だったのね。主人が死んだ時、「俺のそばに来たら」と私を呼んでくれましたね。お嫁さんと二人で出かけたり、食事をしたり。楽しいおもいでになってしまいました。

テレビのサスペンスものや、新聞の三面記事はとっても見られません。生きる希望なんてありゃしない！この世に未練なんてないから早く死んでもいいや！と思いました。

そんな時、ベランダの桃の木に花のつぼみを見つけました。十数年前に買ったのですが、葉は出るが花は咲かなかったのです。今年は花が咲き、食べられませんが五センチほどの実もなりました。捨て鉢になっていた私に生命の強さを教えてくれたような気がしました。

これからも君の思い出を胸にしまい、春になれば花咲く桃のようにつつましく一人で生きたいです。

※相馬さんは住職の父方の伯母、息子さんは従兄弟になります。息子を失った深い悲しみ、そして小さな「桃の実」に、生命(いのち)の強さを見いだす姿に心が打たれます。

世界が平和になるように

町田市 久保みなつ（六年）

昨年十二月二十四日、学校に戦争を体験された方が二人来られて、私達六年生がその方による戦争の紙芝居や、体験談を伺った。

私のクラスは、一時間目から沖繩戦のDVDを見ていた。私はあまり上手く感想を書けないけれど、まず一番に戦争の無い平和な世の中になってほしいと思った。

沖繩戦のDVDや、戦争の体験を聞いていると私が知っている以上に悲惨なことも多く戦争を体験された方の話を生で聞くことで戦争の恐ろしさ、残酷さ、悲しさを身に沁みて改めて感じた。

私の父方の祖母（東京在住）と母方の祖父（新潟在住）も八十代で、共に戦争体験者だ。

祖父は夏休みにニュースを見ながら、終戦する時玉音放送を聞いたが当時は何と云っているのか分からなかったと笑いながら話していた。祖父がこうして笑って当時のことを話せるのも、今日本が平和であるからだと思う。祖母は、十一、二の頃東京大空襲を体験した。空襲で家は焼け、祖母たちは必死で逃げたという。一か八か、死ぬかも知れないと思いつつながら、町の人たちは駅の防空壕に二、三十人が入ったそうだ。その中に、幼い祖母も

混ざっていた。

狭く、真つ暗な防空壕。誰かが「夜が開けたよ」と言い祖母たちが外に出ると、道が全く分からない焼け野原で空は真つ赤。防空壕の前の、葉の焼けた高い木には人間の手がぶら下がっていて、それを見つけて大人に「見えてはいけない」と言われたと祖母は話していた。すると、どこからか甘くていい匂いがしてきたそうだ。「あ、キャラメルの匂いがする！」。子供たちは叫んだ。どこかの金持ちが闇で砂糖を買いこんでいて、その家も焼けただのでキャラメルの匂いがしたらしい。

祖母は、この頃少し物忘れが増えてきて、買ったものや、したことも、私と妹の年齢も少しあやふやになってきているけれど、昔のこと、戦争のことは今でも鮮明に覚えていて尋ねれば何度でも話してくれる。

祖母は戦争という大きな悲しい傷を心に持ちながらも、今は明るく元気に生きている。昔のことを話す時も、高田の祖父みたいにニコニコしている。

けれど、戦争という傷を抱えて生きている人はまだまだ沢山いる。そして、その傷に今も苦しんでいる人が、世界中に数え切れないほどいる。

「戦争はいけない」という言葉はありきたりで、今も戦争をし続けるような人には伝わらないうちかも知れないけれど、その言葉には

多くの、数え切れないほどの人の思いが込められているから、私は戦争はいけないと唱え続ける。戦争を体験していない、平和な時代に生きる私に偉そうなことは言えないけれど、戦争の恐ろしさ、悲惨さを伝えていかななくてはいけないのは私たちだ。これから私達が戦争なんてしてはいけないということの後世に伝えていかなければならないだろう。戦争の恐ろしさ悲しさを語り回すような団体に入ったり、物語を作ったりしなくても、身近な人に戦争を伝えることはできると思うので、私も平和な世界を心から願って、戦争が無くなるように、まずは小さなことでもしていきたいと思います。

※久保さんは今春より中学生、本文は六年生のときのものです。戦争の悲惨さ、平和の大切さについて深く考え表現されます。小学生の訴えに、大人である私たちはどう応えるのか問われます。

日本が再び戦争への道を歩まないために。

犬・猫超高齢化社会？

犬と猫の平均寿命がモーターに伸びているという。十五歳を超えた犬猫が、長寿表彰されたのはそんな昔のことではない。いまだ十五歳を超える犬・猫なんぞ当たり前。

犬・猫の超高齢化社会の到来か？ 介護付の老犬猫ホーム、犬猫デイサービス？。ともすると犬・猫の介護保険！ 何か笑えない。

ワン公物語 ⑬

—華のつぶやき—

山崎 華（慎子代筆）



私は華。パグ犬の雌、六月には九才になる。母さんが時々私を抱きしめて「華 長生きしてね。ずーっと一緒にいてね」と囁く。

大事に思ってくれるのは有難いけど、もし順番通りなら、そりゃあ私の方が先に決まっている——と私は思う。母さんはいつも、そんなに長生きしなくても良いナ、なんて言ってるけど、それだって分かったもんじゃありませんよ。寿命というものがあるし、縁があれば出会ったり別れたり、生まれたり死んだり、そんなこと当り前だもの。それに多分、いざ死にそうになったら相当混乱するに違いないよ。珍しく私は偉そうに考えている。

でも死ぬってどういうことかなア。蓮姉ちゃんが居なくなってしまう、あれが死ぬということなの？。二十五年來の相棒で、母さんが大事に大事に思っていたユキさんが姿を見せなくなると、母さんは溜息と共にユキさんを思い出しているけど、それもそうなの？だとすると、死ぬって残された方が辛く寂しいことなのかなア。柄にもなく私は少々ムツかしいことを考えてみるが。マ・イイか。

それはそうと、このごろ私の体型や顔や雰囲気「蓮ちゃんそっくりになってきたね」とけい子さんやゆう子さんが笑っている。自分でもそう思わないでもない。蓮姉ちゃんがそうだったように、近頃は散歩も億劫になってしまった。「散歩だよ」と言われた瞬間は嬉しいのだ。ハーネスをつけて貰っている時のワクワク感は最高なんだけど、家の敷地を出たとたん溜息が出てしまう。三步あるく止まる。かけ引きの後しぶしぶ歩く。三步あるく。また止まる。その繰り返し。父さんは容赦ないから引っ張られるように歩くのだけれど、内心はヤレヤレなのだ。

たまに母さんが連れ出してくれた時は、母さんとのかけ引きで、なかなか長引いてしまふ。しまいに母さんがお三歩あるいてすぐ止まる——よだね と笑ってしまう。

相変らず食べることは大好きで「ごはん」「おやつ」という言葉に弱い。ごはんの量も決まっているのだが、運動不足が災いしてスレンダー自慢だった私がすっかりふくよかになってしまったという次第。

でも私はワン公だから人間のように「私だっ」て昔はスマートで恰好良かったんだから「なんて決して言わない。「キビキビと敏捷だったんだから」なんて自慢もしない。過ぎたこととは良い、今が大事。耳も遠くなり目も弱り白髪も増えてお太り気味。全てに興味があっ

て落ち着けなかった日々も それはそれで懐かしいのだけれど、今の呑気で穏やかな毎日もなかなか捨てたものではない。好きなだけ眠り、母さん達と戯れて、ほんの少しの散歩。なんて優雅な暮らさう。

そうそう、去年の山崎さん家の流行語についてつぶやきをひとつ。

隆史兄さんが住職になってからのお寺からの文書は全て兄さんの名前が出ていた。「どうしてだ？」兄さんの半ば不慢そうな呟き。ある日父さんと二人話し合っている。「今度の文書、僕が書こうか、それとも君がかく？」父さんが尋ねる。「仕事が少し詰まっているのでお願いします。ついでに名前も父の名にして下さい」と兄さん。「それはダメさ。どんな組織だって代表者の名前でしょ。君の会社もそうでしょう」兄さんは「あゝそうですね」と言いながらも複雑な表情だ。「任せると言われれば僕が作りますが」父さんが言うのと兄さんがすかさず言い放った。「君！やってくれたまえ」それからしばらく山崎さん家では「君！やってくれたまえ」が流行したという次第。

そんな二人のやりとりが私にとっては何やらやましく、蓮姉ちゃんがいたらナアと寂しくなってしまう。でも デモ マ・イイか！。